

槐

かい

岡井省二創刊

平成16年1月号

平成十六年一月一日発行 第十四巻第二号 通巻第一五二号（毎月一回）日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



ダークマター

高橋将夫

生と死のあはひに入りし襖かな
鬼の子の知恵を絞つてをりにけり
宵闇にこぼれてゐたるしやうゆ豆
酔芙蓉向かうをむいてをりにけり

新豆腐おつぎは芥子蓮根よ

よくわかる花野の道の案内図

天高くして火口湖のエメラルド

天の川流れ地底にマグマかな

大日の羽織れるダークマターかな

創刊百五十号記念大会二句

大日や秋の野に立つ金字塔

捏ねて揉み打つてさはやかさぬきかな

鬼の霍乱

中島陽華

頬に受く秋風なりし玉拾ひ
芭蕉葉の揺れ軒低き旧家かな
立待や十七才の太郎の夜
鬻島田甚句流るる相撲茶屋
籠つけし着物を縫うて神無月
初汐や唐人踊の音聞こゆ
鯨幕めぐらしてありきりぎりす
おごそかや髭の濡れたる冬至粥
沢しんと雲なき小春日和かな
高千穂やキリストの顔夜神楽に

特別作品

射干貝小癩にも口開きをり
鬼の霍乱坂下の曼珠沙華
舌先の荒れ収まりし浮寝鳥
仲良しや潮目の秋刀魚膳の上
重ね履く絹の靴下冬の月
バス停の名は大職冠天高し
かにかくに辰巳芸者と枯柳
ちよこまかと齒のなき婆の臘八会
肥後菊やころころ笑う子とをりて
時雨忌やインターネット立ち上ぐる

槐安集

市場基巳

昨夜の雨払ひて羊齒を刈りにけり
吹き晴れて蜂の飛ぶ日の遠青嶺
秋つばめそこはかと日は堅魚木に
山影冷ゆ羊齒に九月の日はあれど
白萩にあした天氣の空焼くる

水野恒彦

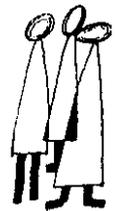
西方や木賊を刈れば日暮あり
梅の木の周りの穂草刈られあり
しろがねの潮目なりけり鶴渡る
おほかたのひとの旦過に初しぐれ
狐火や沖紺青の夜となれり

石脇みはる

齒が抜けて星飛ぶ夜に祀りけり
橡の実をにぎりしめたるぬくさかな
柞原どこかに人の埋もれる
冬麗やいないないばあをくり返し
月光に口をぬぐひし鳥かな

竹内悦子

青虫の足音もなく阿弥陀かな
檀特や焼香の列とぎれざる
十月の川のぞきゐる櫻かな
玲羊の横切りし山に秋の虹
石路咲いて静かなりける机かな



木下野生

草紅葉大洋はいましづかなる
いわし雲小学校がいま終り
人動きをり芒野の端のはう
秋の日のこはれしねずみ捕り器かな
烏瓜村を出てゆく話なり

中島陽華

月さやかきんかん頭とフラメンコ
たかだかや金牛蒔とて掘り上ぐる
神無月狂女かざしを手にしたる
へそ石に柳ちるちる六角さん
菊の香やからだ透けたる魚のあり

延広禎一

長月の火星を仰ぎ馬刺かな
月夜茸を鎧ひし櫛の空洞うつつろかな
焰硝蔵の傍への茸みないびつ
紅茸を水に晒してをりにけり
ほつこりと寝壺ありたる大花野

栗栖恵通子

不知火の兆しありけり膾骨
くさびらの指五本の匂ひかな
蓮の穴死海に何ぞ浮いてをる
まつくろな舌出す月の鸚鵡かな
銀漢や海老の背腸を出してをる

加藤みき

千草野に散らばつてをる面かな
唇をしかと結ばむさねかずら
白鳥のこゑに人の名聞きゐたり
蓮の種とびたる穴に緋縮緬
立冬や逆潮にのる鳥の群

大島翠木

いわしぐも藍座布団の匂ひかな
天心の月どこまでも蕎麦の花
柿の臍深し濃き山薄き山
山へ退く花野の靄に牛の貌
撓みつつつひと思ふ日の式部の実

槐市集

天野きく江

艶やかにそれぞれ蛇の穴に入る
鳥声のあまた去来の吾亦紅
礼砲やもうすぐ割れる石榴の実
濤音や小さき峡のさねかずら
星々を塵とは云わむ新松子

雨村敏子

ころころと喜ぶ顔や盆の栗
吾亦紅の玄きくれなる砂州近し
田の神を送り三宝納ひけり
苦瓜を妙めてをりし手もとかな
臨月の娘に初掘りの衣被

秋岡朝子

障子貼つて机の位置を変へにけり
林中を透ける日射や藪枯らし
あぶれ蚊や夫にかくれて煙草吸ふ
草の絮水の上に出て透きとほり
恍惚と泡立草に踏み入りぬ

岩月優美子

海猫の疎らに釣瓶落しかな
うそ寒や錦絵の馬あかあかと
緞帳の降りしままなる紅葉山
一山の向かふよりする鹿の声
黄落や神仏隣り合せなる



槐集

高橋将夫選

萩咲いて黒衣さはさはゆきにけり

枚方

中野 京子

何もおかぬ座敷をはなれ新松子

一葉落つ土竜の肌の桃色に

岡崎

本多 俊子

墨するや秋の金魚の真正面

十月の鯛奉書紙の中にある

たてよこに流る稲妻髪を染む

わだつみに白波立ちし穴惑

曝涼の中にどつかと坐りをり

無花果の舌に沁みぬる斑鳩よ

前方後円墳芋莖畑に下りてゆく

苔の露光の底へ日は落ちぬ

香川

黒田 咲子

白ぬりの目尻の黒子西鶴忌

多羅葉に面差し澄んでをりにけり

月夜茸大振袖を縫ひすすむ

こめかみに薄日十月桜かな

菊之助の蹴出し捲くるる真葛

鴟が声ままよ大胆めめず這ふ

目の縁の紅のひろがり後の月

鳩どりの水うらがへしうらがへる

工房の柿渋匂ふ十三夜

国分寺しぐれ降れども鳥多し

枚方

谷村 幸子

星流れうづくまりあるペルシャ猫

十月の登りきつたる砂丘かな

長き夜の甲骨文字と勾玉と

体じゆうに海風うけて暮の秋

天高し鳴門の渦の巻きはじむ

諦めてぬし瓢の実の鳴りにけり

シスターの笑顔すぎゆく棗の実

頭陀袋つみあげてあり青鷹

くさびらや講話もれくる達磨寺

銀河往來 高橋将夫

― 新生「槐」、三年目を迎えて ―

▽明けましておめでとう。新年を迎える度に、時の早さを思いしらされるが、平成十三年十一月の第十回槐全国大会に始まる新生「槐」も、はや三年目を迎えた。

昔、野球で「三年目のジンクス」と言われたことがある。しかし、

今年の槐にあつては、なぜかいいことがありそうな、いい句ができそうな、そんな予感がされてならない。

▽日本は世界一の長寿国。平均寿命が女性八十四歳、男性七十七歳で、最高齢はなんと百十六歳だという。なにかと問題点も指摘されているが、俳句をやる時間がそれだけ延びたという意味では、まことに喜ばしいことだと思ふ。

人生五十年といわれた時代にあつて、充実した晩年を送つた人々を紹介しておこう。誌友の中には、まだまだ関係がないと思ふ世代の方々も多いが…。

|| 伊能忠敬は五十歳から天文学を学び、全国を踏破して日本地図を作成した。

葛飾北斎の世界的に有名な『富嶽三十六景』が完成したのは六十歳の後半であつた。

『解体新書』を書いた杉田玄白の『蘭学事始』が完成したのは八十三歳のときであつた。

貝原益軒の『養生訓』が完成したのは八十歳を過ぎてからであつた。(江宮隆之著『晩学のすすめ』より) ||

曝涼の中にどつかと坐りをり 中野 京子
曝涼は虫干し。景も表現も簡明。しかし、この句には「全てをさらけ出し、その中にどつかりと坐っている」いさぎよさと、すがすがしさがある。精神の風景。

月夜茸大振袖を縫ひすすむ 雨村 敏子
大振袖を縫っている。めでたい。だが、めでたさばかりではなさそう：月夜茸だから。

星流れうづくまりゐるペルシャ猫 近藤きくえ
星が流れて、ペルシャ猫がいる。むずかしいことは言わずに、メルヘンの世界をしばらく楽しもう。

わだつみに白波立ちし穴惑 本多 俊子
こちらは穴惑で、あちらの海には白波が立っている。まるで、穴惑にシンクロナイズして波立っているようだ。

鳩どりの水うらがへしうらがへる 黒田 咲子
鳩の羽ばたきで水が裏返り、自らも裏返る。この重層性がなんともおもしろい。よく見て、よく表現できた。

十月の登りきつたる砂丘かな 谷村 幸子
登りきつた砂丘の、その先は…。十月というクールな季語が砂丘の質感によくマッチしていよう。

(以下略)